

はじめに

「昔の暮らし」とは、はっきりした時代を表す言葉ではありません。現在の小学校の学習教材の「昔の暮らし」は、身近にいる祖父母の子どもの頃の話に焦点を当てています。しかし、江戸時代も明治・大正時代も昔には違いありません。

本展の「昔の暮らし」は、昭和30年代から40年代の暮らしをその対象としました。このころの日本は、戦後の混乱が落ち着き、経済規模が急速に拡大する高度経済成長期と呼ばれる時代でした。県内にも工業地帯が形成され、農村の生活も兼業化が進み、現金を手にすることによって人々の所得は増加し、生活水準も引き上げられました。暮らしの中に、「三種の神器」（白黒テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫）と呼ばれる家電製品や機械製品が普及し始め、生活の近代化が進むこととなります。

本展は「民家展示」と銘打ち、房総のむらならではの復元家屋の中で、「着る」「食べる」「住まう」「遊ぶ」をテーマに、生活用具を通して受け継がれる文化とその変化の一端をご紹介します。第1会場は、商家町並みにある「薬の店」の2階展示室です。白黒テレビや電気炊飯器、手回し洗濯機など昭和40年代の近代化された生活用具を中心に展示しました。第2会場は、上総や下総の農家で、カマドや囲炉裏が継続して使用され、藍染の仕事着が着用されていた昭和30年代を中心とした生活用具や遊び道具を展示しました。

私たちの生活は、古い時代のものを受け継ぎながら少しずつ便利なもの、手に入りやすいものへと置き替わっていきます。例えば、手桶がブリキ製のバケツになり、やがては工業製品のプラスチック素材に替わっていきました。しかし、手桶としての用途は受け継がれています。また、展示資料にある「手回し洗濯機」にみるユニークな形は、時代を象徴するような形態です。

本展が、ご覧いただいた皆様の「昔」を語る場になることを切に希望します。